

米子地区の全学共通科目の調査における成果と課題

教養教育センター准教授 きりやま さとし
桐山 聡

1. 米子地区の全学共通科目調査の実施目的と概要

医学部医学科の教育課程は、平成 19 年度まで、基本的に 1 年次の鳥取地区における教養教育と、2 年次以降の米子地区における専門教育から編成されていたが、平成 20 年度以降は、教養教育・専門教育とも 1 年次から一貫して米子地区で行われている。その目的は医学教育の一層の充実を図ることにあつたが、これによって鳥取大学の全学共通教育は教育内容・教育方法の点で鳥取地区・米子地区に二元化することになった。

こうした状況において本調査は、鳥取地区・米子地区における全学共通科目の教育水準に関して質的な一元性を保証するため、米子地区の全学共通科目の実態を把握し、必要に応じて改善を提言することを目的としている。

令和 4 年度前期までの調査概要、改善実績は以下の通りである。まず平成 21 年度から平成 25 年度まで毎年、医学科の学生を対象として、共通教育への満足度のアンケート調査およびヒアリングを行った。平成 26 年度の調査では、上記 5 年間の調査において医学科の学生から改善を求められている授業科目について、前・後期各 1 回、授業参観、ヒアリング、ならびにアンケートの 3 種類の調査を実施し、調査結果を踏まえて鳥取地区からの教員派遣やクラス規模の適正化を提言した。平成 27 年度からは、調査対象を医学部全学科に広げ、同様の調査、および提言を実施している。平成 28 年度後期の調査から、自由記述式アンケートのフォーマットを改善し、授業内容の充実度など 4~5 点について選択回答方式を追加採用した。平成 29 年度後期の調査から、自由記述式アンケートの選択回答方式の設問に「授業を開講している意義について」の理解度を問う設問を追加している。

令和元年度前期は、アンケート設問の全面的な見直しを行い、鳥取地区における英語教育との比較を行うために保健学科・生命科学科の学生向けの設問を増やして調査を行った。また、アンケート調査の範囲を初修外国語、基幹科目（自然分野）に広げた。

令和 2 年度は、コロナ禍のために前・後期ともに調査を実施しなかった。

令和 3 年度前期以降は、授業参観を取り止め、鳥取県内におけるコロナ感染状況を考慮し、アンケート調査およびオンラインによるヒアリングを実施している。

本報告では、平成 26 年度前期から一貫して実施している自由記述アンケートおよびヒアリングから得られた結果から調査の成果と課題を整理する。

2. 調査方法

(1) 令和元年度以降のアンケート調査方法

調査対象である授業科目の担当教員が履修学生に A5 サイズの簡易アンケート用紙を配布し、①当該授業の内容の充実度、②教員の説明・手法の分かりやすさ、③鳥取地区で受講した関連科目とのつながりの円滑さ（保健学科・生命科学科のみの設問）、④受講生の受講態度、⑤授業への満足度、に対して 4 水準の選択回答式、および自由記述式アンケート(⑥当該授業の改善の要望、⑦米子地区全学共通科目全体についての改善の要望)を実施した。アンケート用紙は授業直後に回収した。

(2) 学生に対するヒアリング調査

英語科目を含む全学共通科目全般について各学科・専攻の 2 年生に対するヒアリング調査を行なった。ただし、医学科は 1 年生も対象とした。ヒアリング対象の学生は、医学部学務課へ依頼して 2、3 人を選んでもらった。

3. 調査結果の概要

平成 26 年度前期から令和 4 年度前期までの、学生からの意見を集約すると次のようになった。

(1) 平成 26 年度前期

医学科からは、人文社会系の教養科目の増設を希望する声があった一方、「医学以外では興味のあることしか学びたくない」、「教養科目は勉強する科目ではない」、「(大学受験後の)息抜きの位置づけ」、「物理学は医学科には不要である」という趣旨の意見が散見された。

(2) 平成 26 年度後期

医学科からは、「教養をやるくらいなら、なぜ他の専門をやらないのかという考え方をする教員がいる」、「教養科目を充実させても、学生自身に時間的余裕がない」、「学習負担の大きい曜日があるため時間割を改善してほしい」と、前期同様に教養科目の充実に否定的な意見が見られた。生命科学科および保健学科からは、英語科目の授業の水準が低いという意見が散見された。

(3) 平成 27 年度前期

同一名称の英語科目における複数クラス間に存在する難易度や進め方、楽しさの差に対して、不公平を訴える学生の声があった。一方、医療に必要な英語が学べる点を長所として挙げる学生の意見があった。初修外国語についても、楽しさを重視する傾向が見られた。

(4) 平成 27 年度後期

医学科では、前期同様にクラス間の差に対して不公平感を訴える学生が少なからず存在した。生命科学科および保健学科からは、平成 26 年度同様、英語科目の授業水準が低いという意見が出された。

(5) 平成 28 年度前期

英語科目は、平成 27 年度と同じ傾向が見られた。加えて、一部のネイティブ教員の説明が聞き取れないという不満も表面化した。一方、ペアワークやグループワークによる「聞く」、「話す」を主とするコミュニケーションに学習効果を見出していることがわかった。

(6) 平成 28 年度後期

学生から否定的な意見が頻出している英語科目は、選択回答式アンケートでも満足度が低かった。なお、選択回答式アンケート結果では、調査対象とした科目のほとんどは学生の 8 割以上が満足していた。

授業改善の一環として、担当する非常勤講師の交代が平成 29 年度前期および平成 30 年度に行われた。

また、医学科からは、本学における留年人数の多さを挙げて専門必修科目の配分の見直しを希望する意見が出された。

(7) 平成 29 年度前期

自由記述アンケートでは否定的な意見は多くはなかったが、ヒアリングにおいては主に英語に関して不満や疑問も出された。これらを踏まえて鳥取地区と米子地区の英語教員間で授業改善のためのディスカッションが行われた。

(8) 平成 29 年度後期

医学科からは、平成 26 年度と同様に、専門科目の負担が大きいため取り組む余裕が無いという意見が出された。一方で、人文社会系科目の充実を望む声もあった。保健学科からは、宿題のフォローが不十分な一部の英語科目に対して改善要望が出された。

(9) 平成 30 年度前期

医学科からは、平成 26 年度と同様に、専門科目の負担が大きという意見が出た。

平成 29 年度に改善要望が出された英語科目に対して、ヒアリングにおいて鳥取地区の英語教員から「授業内の活動が学期のカリキュラムの中でどのように関連しているのかが不明確」、「前年度から改善された点はあるが、授業内活動の意図が分かりにくい」という問題点が指摘された。

(10) 平成 30 年度後期

医学科からは、平成 30 年度前期と同様に、専門科目の負担が大きという意見が出た。

(11) 令和元年度前期

医学科から、平成 26 年度後期と全く同じ「学習負担の大きい曜日があるため時間割を改善してほしい」という要望が出された。保健学科からは、同一名称の英語科目の内容につ

いてクラス間に差があるという指摘があり、鳥取地区の英語教員から「テキストも含めて統一感を出せるように米子地区の英語教員と協議する」と回答した。

(12) 令和元年度後期

保健学科からは、鳥取地区で受講した関連科目との円滑なつながりに関して否定的な意見が出された。

(13) 令和3年度前期

医学科からは、専門科目の勉強の負荷を考慮してもらいたい旨の要望があった。また、英語科目については、同一科目で複数クラスに分割開講していることに対して、担当教員の教え方や内容に差があることが指摘された。上記の2点は、令和元年度までのヒアリングで繰り返し指摘されている。

生命科学科および保健学科からは、令和元年度の調査までは、英語科目の難易度について、鳥取地区の授業と比べ簡単だという意見が聞かれたが、今回のヒアリングでは鳥取地区との落差は感じられないとの意見が出された。ただし、同一科目で複数クラスに分割開講している一部の英語科目に関しては、医学科と同様の指摘があった。

(14) 令和3年度後期

医学科からは、グループワークやディスカッション等のスピーキングのアクティビティについて肯定的な意見が多かった。教養科目のオンライン授業化に対して肯定的な意見が多かったが、オンライン化に伴う設備の不具合に対する不満も多かった。

生命科学科および保健学科からは、英語の授業で習った知識が他の授業の内容理解に役立ったというコメントがいくつか出された。また、総合英語のテキストが簡単だという意見が多く出された。

(15) 令和4年度前期

医学科から、基幹科目（自然）の一部科目について、説明が分かりづらいという意見が出された。

生命科学科および保健学科からは、令和3年度後期と同様に、複数講義室を使用した同時配信方式（サテライト方式）における設備の不具合に対する指摘があった。英語科目については、ヒアリングが不得意な学生からネイティブ教員による重要事項の説明を聞き取れないことに対して不満が出された。

全学共通科目全般に対しては、コロナ感染症対策として普及したオンデマンド授業の学習における効果を評価する声があった。

4. 調査の総括

本報告では、アンケート用紙に記入された自由意見や、対面形式およびオンライン形式のヒアリングから授業に対する学生の意見を汲み取った。

調査を通して得られた成果は、英語科目の実施実態を把握できたため、鳥取地区と米子地区の英語教員の間で授業改善のための意見交換が実現したことである。これにより米子地区の教員が主体的に授業改善していくことが可能となった。課題は、同一名称の複数クラス間に存在する授業内容や進め方の違いに対して学生が感じる不公平さである。平成 26 年度以来この意見が途絶えることはない。これに対して、米子地区の常勤英語教員が非常勤講師とさらに連携して授業の難易度のレベル差を少なくするようコミュニケーションを取る必要があると考えられた。

全学共通科目全般については、医学科生の一部が「教養科目は息抜きの時間」と捉えており、それは自由記述アンケートの回答にも頻出する「楽しい」というキーワードにも表れている。一方、オンデマンド形式の授業が普及したことによって、学生が余裕をもって全学共通科目に向き合うことも可能となったことがわかった。専門科目の学習負担が大きいという意識を持っている医学部生、特に医学科生に対して、オンデマンド授業科目や manaba を活用したデジタル講義資料の整備が今後の課題と考えられる。また、医学科生からのヒアリングを元にすれば、専門科目と全学共通科目の配置のバランスにまだ改善の余地があると考えられる。

5. 今後の展開

米子地区におけるシラバスや授業アンケートを鳥取地区とすり合わせることによって、両地区の全学教育科目の定量的な比較を検討していくことが考えられる。しかし、ヒアリングによって、アンケート用紙に書くことを躊躇われる意見も聴取することができ、それが問題の発見と改善提案において有効であった。したがって、ヒアリング調査は現在の形を継続して実施することが望ましい。

また、学生が全学共通科目に意味を見出せるかによってアンケートの自由記述欄に書かれる内容に落差が見られる。課題としては、米子地区における全学共通科目の必要性や意義についての積極的な啓発が挙げられる。